大丈夫よ！お母さん！

vol.36

教育コーディネーター　中西美沙子

（今回のテーマ）

雨の降る日は

子どもの魅力は、「遊ぶ」にあります。家の中や庭、公園など、どこでも子どもは楽しく遊びます。今の子どもは、遊ぶ道具（おもちゃ）をたくさんもっています。公園にも遊具がいっぱい。それは豊かさの象徴でもあります。でも、「工夫する遊び」が消えて久しいと感じるのは、私だけでしょうか。その感慨の奥にあるのは、「工夫すること」で育つ、想像する力の弱まりです。

子どもは、なぜか遊びを見つける名人。一枚の新聞、壊れたバケツ。家の隅という特別な空間。お菓子のきれいな箱。どんなものでも遊びの題材となり、子どもの想像力は無限に広がります。そのことを豊かさの中で、私たちは見失ったのかも知れません。

初夏の光の中を、孫たちが公園めがけて、駆けていきます。雨の日は、飽きずにブロックを組み、壊してはまた組み立てます。遊びの合間には、楽しいおやつ。

子どもは「晴れの日」も、「曇り」や「雨の日」も大好きです。暖かな日、寒い日でさえも。その元気さを作っているのは、子どもを大きく見守る親の柔らかな目でしょう。

雨ふれば　障子の中、母さん　やさしい。
縫物される針　すいすいと　光る。

まどみちおさんの詩です。障子や縫い針などは、今では多くの家から消えかかっていますが、でもこの詩には、これからも永く残るであろうという希（まれ）な感覚を持つのです。

この詩の魅力は、母と子の関係の濃さです。雨が降ると子どもは、外で遊ぶことができません。家の中で過ごすのです。この詩の中の子どもは、何かをして遊ぶのではなく、お母さんの縫物をする手を、じっと見ています。

外は雨。雨が家を包んでいます。障子の中は、お母さんと子どもの二人だけ。優しく縫物をするお母さんの手が、魔法のように鮮やかに動いています。縫い針が、きらきら光っているのを、うっとりと子どもは見ています。このような世界に触れると、何が大切か、わかってきます。

何も無くても子どもは、幸福に感じることができます。物を与える、遊び場所を考えるのも良いことでしょう。でも「何気ない時」の中にも、心を充実させるものはあります。

遠くで蛙（かえる）の声が聞こえる。雨がやってくるような気配がします。

「問わず語り」という言葉があります。私は本を読むのが好きで、本を読みだすと周りが見えなくなることがありました。子どもが何かを「問わず語り」に言います。その言葉の意味を返すのではなく、柔らかな空気のように私は、応じます。子どもは、クレヨンで絵を描いています。そしてまた何気なく問いかけます。雨の日は、そのように過ごすことがありました。

娘は成長し、今では二人の男の子のママ。元気な二人はいつも仲良く遊び、喧嘩（けんか）をして、貴重な時を楽しんでいます。写真付きのメールが時々、送られてきます。「今日はお庭にプランター増設！トマト、ピーマン、ナス、きゅうり、バジルを植えたよ。おまけに大好きなヒマワリも。楽しみ楽しみ！」。プランターの横で、子どもたちが笑っています。

夏の輝くような季節の到来と、夏を慈しむ子どもの声。幼い頃の娘の声に孫たちの声が重なります。

Profile

教育コーディネーター

中西美沙子

静岡大学客員教授。文章教室「スコーレ」画廊「キューブブルー」などを主宰。文章教室は書き方を教えるだけではなく、生き方や考える視野を学ぶところです。

問 tel 053-456-3770

中西美沙子　検索

ピアニシモでね

中西美沙子 著

著書の「ピアニシモでね」（東京書籍）は、中日新聞に連載された人気コラム「つかまえて！こころ」をまとめたもの。同著には、親子の問題もいろいろ描かれています。（税込1,500円）

※お求めは浜松市内の谷島屋で。